

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月16日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520388

研究課題名（和文） 「切字釈疑」 訳注

研究課題名（英文） Japanese translation and annotation of “Qiezi Shiyi”

研究代表者

富平 美波 (TOMIHIRA MIWA)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：00188799

研究成果の概要（和文）：明末清初の著名な学者である方以智の息子、方中履が著した『古今釈疑』の巻十七の部分にあたり、全体が10節に分かれた音韻学に関する著述である「切字釈疑」について、日本語訳と注釈を作成し、各節の内容に見られる、音韻学研究文献として特筆すべき点について考察した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have translated “Qiezi Shiyi” into Japanese, and annotated it. “Qiezi Shiyi” is the 17th chapter of “Gujin Shiyi”, the encyclopedic work written by Fang Zhongli, a son of Fang Yizhi, the famous scholar of the late Ming and early Qing era. Through this study, two Fangs’ unique thinking on Chinese phonology is revealed.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 300,000   | 90,000  | 390,000   |
| 2009年度 | 400,000   | 120,000 | 520,000   |
| 2010年度 | 300,000   | 90,000  | 390,000   |
| 2011年度 | 300,000   | 90,000  | 390,000   |
| 2012年度 | 400,000   | 120,000 | 520,000   |
| 総計     | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：中国語学・音韻学

## 1. 研究開始当初の背景

私の専門分野は近代以前の中国における音韻学史の研究であるが、これまで研究対象としてきたのは、先行研究の多い清朝時代のそれではなく、それに先立つ、宋・元・明代の音韻研究史である。この時期は、上古音の研究が初めて本格的に開始された時期でもある。従って、私の研究も、当初からこの時期の「古音」学史の解明を視野に入れていた。最初の関心は宋の鄭樵の「諧声制字六图」か

ら始まり、上古音研究と関連する分野ということで、諧声文字を研究した文献等にも目を向けつつ、最近実施した明の郝敬の『毛詩原解』の音注の調査に至るまで、一貫してこの問題を扱ってきたが、研究を継続するにつれて、この時期の上古音研究は、清朝時期のそれのように切韻系韻書の音韻体系を「今韻」の標準とした上で、それとの対照によって「古音」を研究するという方法が確立しておらず、まず、研究者それぞれにとっての標準

音や「今韻」へのとらえ方を明らかにしながらでなければ、「古音」研究の歴史を跡づけられない面があると認識するに至った。

一方、明末清初という時期は、清朝小学が（上古音研究も含めて）その方法論を完成させる直前の段階にあたり、古いタイプの研究と新しい視点に立った研究とが混沌と入り交じっていた時期であり、直前の時期であるために後の学者からとかく誹毀されることが多く、それに関する詳細な研究が遅れている嫌いがあった。これは、宋以後、清以前のすべての時代についても言えて、先行研究はやはり少なかった。筆者は、従来あまり注目されてこなかった人や業績について詳しく知り、世の中にももっと知ってもらいたいという思いが一貫してあった。

その二つの関心が合流して、次の研究対象として視野に入ってきたのが、明末清初の大学者で音韻研究の重要文献である「切韻声原」の作者でもある方以智の息子、方中履の「切字釈疑」（『古今釈疑』と呼ばれる百科全書的な著作の音韻に関連する章を独立してそのように呼ぶことがある）であった。

この文献を研究対象とするに至ったについては、参照すべき文献がたやすく閲覧できるような、出版上の条件が整ったことも大きい要因の一つである。すなわち、『古今釈疑』そのものの影印本と、「切字釈疑」を含む『昭代叢書』の影印本の刊行が最大の要因で、これがなければ、本研究に手を着ける発想がそもそも出てこなかったであろう。方以智『通雅』（「切韻声原」はその一部）の、和刻本を含む数種のテキストも刊行されており、それらにもあらためて関心を引かれた。両者を実際に手にしてみると、その文中には、筆者がこれまで研究対象にしてきた学者、たとえば呉元満や、上掲の郝敬などが、ひんぱんに引き合いに出され、評論されているではないか。そのことに気付いていっそう興味を引かれた。それに加えて、方中履と方以智が作中で博引旁証する先行の音韻研究文献の多数を収録する『四庫全書存目叢書』や『続修四庫全書』の刊行などの事実が、研究の条件を整えてくれた。しかし、これらの叢書はいずれも高価なものであって、私の本務校に架蔵することはとても望めない。かといって、その都度、大都市の所蔵大学を訪れて閲覧するだけの時間的・経済的余裕はない。そこで、電子版の『四庫全書』を購入することを考え、幸い、平成 17～19 年度の科学研究費補助金（上に記した『毛詩原解』の音注の研究）によって 1 セット導入することができた。

日本国内の代表的な漢籍所蔵機関（国立公文書館・前田育徳会尊経閣文庫・東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所など）は、江戸時代の日本人がこの時期の中国の著述を重要視していたために、宋・元・明・

清初時期の希少な音韻学書を多数所蔵している。今回の研究にあたって何度も参照した『五音類聚四声篇』などもその一つであるが、これらの漢籍が簡単に参照できることは、以前からたいへん有利な条件であると痛感していた。

また諸文献の内容の概略を知るための条件も整いつつあった。以前は、そのために清の謝啓崑の『小学考』や、趙蔭棠著『等韻源流』、永島榮一郎 1941「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料について」などを見るのが習慣であったが、近年は、李新魁・麦耘編『韻学古籍述要』・耿振生著『明清等韻学通論』、陽海清ほか編『文字音韻訓詁知見書目』などが続々と刊行され、多くの書名や版本・内容の概略が簡単に知ることが可能になった。文献が実見しやすくなったために、各文献に関する個別の研究も、本国の中国を中心に一気に活性化している。

このような条件に鑑み、いよいよ本研究を実施できる要件が整ったと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、狭い範囲で言えば、「切字釈疑」を通して、著者である方中履の音韻研究がどのようなものであったか、父親の方以智の音韻研究をどのように受け継いでいたのか、等の点を解明することにある。

だが、より広い見地から見れば、明から清初にかけての時期の中国における音韻学研究の状況を解明する研究の一環と位置づけることができる。ことに、この著作が、一種の音韻学概論的な側面を持っており、全 10 節から成るその内容は、等韻学・反切法から、上古音、中古音、方言にまで及ぶ広い範囲にわたっている。執筆にあたっては、中国の旧時代の学者の多くがそうであるように、父親の著作を始めとして、著者自身が参照した先行文献を種々引用しつつ論述を進めていっている。方中履が脳裏にいたく音韻観の結論だけでなく、それに至った彼自身の研究の状況をかなり具体的に推し量ることができるのである。本研究の遂行にあたっては、それらの引用・参照文献をできるかぎり原典にあたって確認することにより、明末清初という、清朝小学の最盛期にやや先立つ時代に、音韻研究に志す学者をとりまく状況はどんなものだったのかを知る上で、参考になる情報を少しでも増やしたいと考えた。つまり、その頃の学者が音韻の研究をする場合、彼らの机上にはどのような書籍が置かれて参照され、かれらの脳裏にはどのような音韻観一標準音の体系、その規準となる言語、方言の位置づけ、「切韻」系韻書ならびに詩韻の枠組の位置づけ、「古音」の位置づけ、といったことに関する思考や価値観一があったの

か、学問の方法論はどのようなものだったのか、などである。

もっと範囲を広げれば、彼らにとって標準語と言える言語があったのか、あったとすればどのようなものだったのか、読書の際に使用する発音はそれとどんな関係にあったのか等の、いっそう基本的な問題にたどり着く。そして、その時期の学者たちの、地域的なサークルのありあかた、つまり学術的な交流関係の状況、読書法の歴史的な継承性、なども問題になる。本研究を始めるにあたっては、直接それらの問題に取り組めないまでも、それらに関する研究をされている研究者たちにとって、なにがしか価値があると感じられる情報を提供できればこの上もないという意識があった。

### 3. 研究の方法

今回の研究では、まず公刊されている「切字釈疑」(すなわち『古今釈疑』の巻十七)の全文を、まず私自身ができるだけ詳しく読んで、そこに書かれている内容を把握し、方中履の音韻研究の特色を探るべく基礎を固めることを志した。したがって、研究の手順としては、まず「切字釈疑」の本文を構成している10個の節を別々に扱い、そのひとつひとつを次のような手順でひととおり、考察を加え、結果を個々に小論にまとめて公表するという方法をとった。

(1) 入手した5種類の刊本による、本文の校合。

使用したテキストは次の通りである。①を底本として使用した。

- ①1988年7月に江蘇広陵古籍刻印社が線装本の形式で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今釈疑』の巻十七
- ②『四庫全書存目叢書』第99冊(子部)『古今釈疑』(中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印)の巻十七
- ③『統修四庫全書』第1145冊(子部)『古今釈疑』(中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊森刻本影印)の巻十七
- ④1990年7月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字釈疑」
- ⑤1971年5月台湾学生書局が国立中央図書館蔵の旧鈔本を影印刊行した『古今釈疑』(原題 授書隨筆)の巻十六

校合の結果、字句に異同のあった箇所は、各節毎に分割して執筆・公表した小論の中で明示した。

(2) 現代日本語訳の作成。

(3) 文中の引用文献・参照文献の原典確認。

(4) 本文に対する注釈の作成。

(5) 内容の特徴的な点に関して考察を加える。  
(6) 上記の(1)～(5)の結果をとりこんだ、小論の執筆と公表。

### 4. 研究成果

今回の研究の中心的課題は、本文の日本語訳と注釈の作成という点にあったので、その成果については、下記の5に示した雑誌論文を見ていただくしか手だてがないが、この作業によって、「切字釈疑」各節にあらわれた方中履の音韻観・音韻研究の特色がやや明らかになった。それらの点も各小論において論述したが、だいたい次のようである。各節ごとに作業をすすめたので、以下、各節ごとに分けて記す。

#### (1) 第1節「等母配位」

等韻学・等韻図における字母(音節頭子音を表す代表字)の分類と配置順について論じた節である。

方中履は、字母の一覧表を掲載する先行の多くの文献を引き合いに出し、恐らく中古音から少し変化した近世音時代の発音に依拠しながら、字母の正しい配列順がどうあるべきかを、五行説における五音(音楽の音階を構成する宮・商・角・徴・羽の5つの音で、音韻学ではしばしば調音点・調音方法による子音の5分類に対応する用語として用いられる)の配列順に見られる、一種の哲学原理に基づいて説明しようとしている。私にとっては理解のむずかしい節の一つであった。同時に、個人的には、元から明時期にかけて、現実の音韻変化を反映しつつ、歴代の学者たちによって行われた、字母をめぐる数々の議論を跡づけてゆくことができ、国立公文書館所蔵の『大明万曆乙丑重刊改併五音類聚四声篇』に附刻された『經史正音切韻指南』巻首には、「五音分譬之図」など流布本には見えない資料が掲載されていることも発見できた。

また、節末の「等母配位図」の反切を調査したところ、中古音系の韻書の中では、『釈文互注礼部韻略』の反切が最も用字法において近いことを見出した。しかし、部分的には中古音の体系と一致しない音韻的特徴を示す例があることもわかった。

#### (2) 第2節「切韻当主音和」

反切を用いるにあたっては、過去の用字法を「門法」などで補完しながら墨守するのは適切ではなく、反切は本来すべてが「音和切」であってしかるべきであると主張した節である。

この本文を読んで、著者の方中履が「切韻声原」に書かれている父親方以智の方法論や挙例を、父親の名を掲げて祖述していること

がわかった。そして、過去の反切も作られた当時は「音和」であって、それが理解しがたくなかったのは音韻の時代的变化によるものだという解釈に見られるように、方中履には、権威ある旧套を難解な修正を施すことで墨守し続けようとする傾向のある音韻学の伝統を批判し、言語音の実際をじかに記録する手法の重要性を強調しようとする姿勢が見られることがわかった。また、明末に中国を訪れたイエズス会士金尼閣が韻書『西儒耳目資』の中で用いた、ラテン字母を用いて中国語の音節を表す方法を、ぴったり合った音をつくり出し、字音の表記に漏れる部分がなく、まことに簡便であると高く表記していることも注目すべきことと思われた。

### (3) 第3節「門法之非」

韻書の反切の表す字音を韻図の上で特定するための橋渡しとしての秘訣集「門法」について批判した節である。

本文をひもといたところでは、方中履の門法批判は、韻図の存在はひとまずわきにおいて、旧来の反切に直接肉薄し、それらが旧時の言語音の反映であることを認めたり、古い発音が方言音の中に残存している現象に注目したりしながら、最も望ましい方法は、当代の標準音をできるかぎり音を求めやすい用字法によって表すことだと主張して、その方法によって、門法の存在意義そのものを消してしまうことを企図するものだと受け取れた。したがって方中履の主張する反切は、中古音以降の音変化を経た後の状況を反映したもので、中古音系統の韻書や韻図が反映する体系は捨てられていることがわかった。

本節は「切字積疑」の各節中もっとも長大で、かつ、(原書の)注と本文がうまく整合しない箇所なども見られ、趙宦光の「門法表」のような逸書や「洞真譜」という私にはまだ特定できない文献なども引かれていて、はなはだ難解であった。長文であるために、小論の執筆にあたっては、この節だけは、訳注を載せる形式をとらず、前半で、方中履が言及する門法の各条(二十条あるので、何らかの二十門の門法に拠っていることはあきらかである)を、別文献が載せる門法の条文と比較した結果を述べ、後半で、同節で開陳されている方中履の門法批判の概略と特徴について論じた。比較した門法は次の三種類である。

- ①『等韻五種』本「切韻指南」所載「門法玉鑰匙」十三門
- ②東洋文化研究所所蔵『大明正徳乙亥重刊改併五音類聚四声篇』附載の「直指玉鑰匙門法」二十門
- ③国立公文書館所蔵『大明万暦乙丑重刊改併五音類聚四声篇』附刻『切韻指南』の二十門

上記の3種と比較した結果では、「積疑」のそれはどれとも異同があってぴったり合わず、先の「洞真譜」は門法を増補して二十七門を立てていると述べられているが、そのような増補された門法も参照されていることがわかった。

### (4) 第4節「字母増減」

三十字母・三十六字母に始まる歴代の字母の増減の経緯を、多くの音韻学文献を引用しつつ跡付け、最後に「切韻声原」の二十字母説に賛同するという内容であると解釈できる節であった。叙述の中で方中履は、子音に後続する介音の違いや声調(陰陽調)の違いを字母の区別にとりこんで、字母の数を増やす方法には反対していることがわかった。

注釈の作成にあたり、方中履が記述する所に沿って、元の呉澄、陳晋翁、明の呂維祺、趙宦光、葉秉敬、吳元満、張位、李登、清の蕭雲從らの所説を、現存するものは原典にあたり、しないものは言及のある文献を読んで調べ、近世音時期の字母説の変遷について学ぶことができた。

### (5) 第5節「真庚能備各母異状」

「状」とは方中履が父方以智の「切韻声原」から受け継いだ音韻学用語の一つで、後に「四呼」と名付けられるものにほぼ一致する音節(或いは韻母)の分類法であり、この節では、「真庚」韻だけがすべての「状」の音節を完備していることを述べたものである。ここでいう「真庚」とは、『広韻』など中古音を反映する韻書の韻名ではなく、「切韻声原」の「十二統」における「真青」や、「切字積疑」の「切母各状」の図において、方中履自身が言うところの「真・文・恩・庚・青・蒸・侵」の諸韻(中古音における-m、-n、-ng韻尾が区別されずに統合されている)が、それにあたると思われる。

またこの節には、反切の「助紐字」の用字法から説き起こして、上古音を反映する資料で中古の真韻と先韻の字が通用する事実を集中的に論じた箇所があり、「先・天」韻は古韻の「真」韻から転じて生じたものだと結論しているが、これは彼の古韻研究の一端を示すものとして興味深いとともに、中国の仏教寺院に伝承された「華嚴字母」(「華嚴字母韻図」とも呼ばれる)など、上古音と直接関連しない資料を引いて、言語に普遍的現象であるかのごとく説明しようとしている点が特徴的であると思われた。

ただ、「切韻声原」と「切字積疑」が列挙する、種々の調音法を表すと思われる多数の術語について、その意味を明確にしえなかったことは、今後の課題として残った。

### (6) 第6節「啞喞上去入」

標準音の声調体系について、「切韻声原」が提唱する「啞啞上去入」の五声説（平声の陰調と陽調とを区別する）に賛同し、「平・上・去・声」の四声からこの五声説に至るまでの経緯を、先行する音韻学家の声調説の数々を引きながら述べている節である。

方中履はこの節において、通常取り上げられることの少ない珍しい事象をいくつか取り上げて論じている。それは、例えば次のようなものであるが、

- ①私がかつて研究対象としたことのある明の郝敬が「五声譜」において採用している、解釈の極めて難しい五声説
  - ②方中履の同時代に平・上・去・入すべてに陰陽調を区別している『中原韻』が存在していたこと
  - ③韻母の開合の区別によって陰陽調が分かれる方言の存在
- これらの実態に近づこうと調査をしたものの、結局十分解明できずに終わったことが反省点となった。

#### (7) 第7節「発送収」

音節頭子音の調音様式の分類である「発」（全清音すなわち無声無気音）・「送」（次清音すなわち無声有気音）・「収」（次濁音すなわち鼻音や側面音など）について、「切韻声原」の所説を継承しつつ、論じた節である。

論述の中で方中履は、この区別と、声調が陰陽調に分かれたことで生じた「啞・啞」の区別とが別の事象であることを指摘し、李登の『書文音義便考私編』のように、両方の区別を字母に反映させる方法を批判しており、言語音声を区別する特徴をできるだけ分析的に把握しようとする姿勢を伺わせていることがわかった。また、その点に関して梵語の「悉曇章」や金尼閣の『西儒耳目資』を高く評価していることは、外国文化に対するとらわれないまなざしを感じさせた。一方、中国伝統の概念である五行、「河図・洛書」、楽律などに基づいて「発送収」や字母の並び順を説明しているのだが、その所説が私にはすこぶる難解であって、正しく解釈することができなかつたのが憾みである。この五行説に基づく一種の科学理念のようなものも、梵語の知識についても、父の「切韻声原」の記述から受け継いだ側面が濃厚で、方家の学統の存在を感じさせた。

#### (8) 第8節「叶韻」

「切字釈疑」の中でもっぱら上古音（「古韻」）について論じた唯一の節である。上古音時代の詩文の押韻が後世の韻に合わない所を「叶韻」で解決する手法に反対し、それこそが古音の反映であると主張する「古本音説」の立場に立ったもので、方中履が上古音研究の分野でも進歩的な思想の持ち主であ

ったことがわかった。

論述の中では、先秦～漢時代の文献から、多数の押韻、通假などの例が引かれており、それらの典拠の調査に多大な時間を費やしたが、むしろ、この節を読んで、音変化に対する著者の保守的でないとらえかたが明らかになったことが収穫であった。方中履は、従来「叶韻」とされてきた部分に、古の音の姿を認めているのであるが、そこには、聖賢の時代の音を今に伝える資料として珍重する崇拝的なまなざしは感じられなかった。むしろ、既に消失した字音を書き留める文字遣い等が強いられるのは余計事であるとして非難しているようであった。上古音から中古音への変化も、中古音から近世音への変化も、同じく自然な現象であって、当代の人間は当代の発音に基づいて話し、詩歌などを創作するのが最も好ましいというのがその主張であるようで、規範に拘泥しない自由思想の持ち主であった如くに感じられるが、果たしてそのように判定するだけでよいのか、それとも、詩韻に代表される中古音系を規範視せず、近世音時代の音を標準音とみなす気運などが背景に存在するのか、なおつっこんだ考察が必要と思われた。

#### (9) 第9節「沈韻」・第10節「方言」

この二つの節に関しては、期間中に訳注を含む成果の公表が間に合わなかった。

現時点で、どちらについても、和訳（草稿）と、主な引用文献の収集は完了しており、それぞれの節で著者の方中履が何を言わんとしているかもだいたいとらえることができているつもりである。第9節の「沈韻」は、中古音時代の韻書の音韻体系が詩韻として墨守され続けている状況を批判し、時代によって音変化が生じた今では、それは規準としての作用を持ち得ないとして、周徳清が『中原音韻』の編纂によってなした革命的な試みを高く評価した節である。第10節の「方言」は、父の方以智が『通雅』の「方言説」や「諺原」の条で論じていることがらをほぼ全面的に引用することで成っている節であり、『春秋左氏伝』や揚雄の『方言』等から、下って宋や明の学者が筆記や紀行の中で記録した俗字・俗語に至るまで、多くの例を引きつつ、主として方言語彙について論じている。

注釈は一部書けているものの、これから完成に向けて取り組まねばならない状況であり、結局、節二つ分を積み残してしまったが、今後は節ごとの考察でない「切字釈疑」全体の特徴を論じるべく、平成25年度からの研究課題として『「切字釈疑」の研究』（課題番号25370480）を認めていただいたので、この研究遂行の前提として、早期のうちに、第9節・第10節の訳注完成をめざし、成果を公表したいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ①富平美波、方中履『切字积疑』「叶韻」の条を読む(「切字积疑」第 8 節訳注)、アジアの歴史と文化(山口大学アジア歴史・文化研究会編)、査読無、17 輯、2013、pp. 39-64
- ②富平美波、方中履『切字积疑』「發送収」の条を読む(「切字积疑」第 7 節訳注)、山口大学文学会志、査読無、63 卷、2013、pp. 37-52
- ③富平美波、方中履『切字积疑』「啞上入」の条を読む(「切字积疑」第 6 節訳注)、アジアの歴史と文化、査読無、16 輯、2012、pp. 23-43
- ④富平美波、方中履『切字积疑』「真庚能備各母異状」の条を読む(「切字积疑」第 5 節訳注)、山口大学文学会志、査読無、62 卷、2012、pp. 1-18
- ⑤富平美波、方中履『切字积疑』「字母増減」の条を読む(「切字积疑」第 4 節訳注)、アジアの歴史と文化、査読無、15 輯、2011、pp. 59-79
- ⑥富平美波、方中履『切字积疑』「門法之非」の条を読む、山口大学文学会志、査読無、61 卷、2011、pp. 49-70
- ⑦富平美波、方中履『切字积疑』「切韻当主音和」の条を読む(「切字积疑」訳注 2)、アジアの歴史と文化、査読無、14 輯、2010、pp. 1-30
- ⑧富平美波、方中履『切字积疑』「等母配位」の条を読む(「切字积疑」訳注 1)、アジアの歴史と文化、査読無、13 輯、2009、pp. 1-29

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

富平 美波 (TOMIHIRA MIWA)  
山口大学・人文学部・教授  
研究者番号：00188799

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：